

地域、ネットワーク、教育

地域とネットワークが学生を変える

酒井 弘一
小樽商科大学 商学部

現代の若者は、自己に対する確信の程度、方法に不透明感を抱いていると言われている。それは当事者である若者自身も感じているところである。

本稿ではこのような若者の自己変革に対し、地域やネットワークが持つ可能性について、実践に基づいた考察を加えていく。

District, Information Network, and Education

Koichi Sakai

Otaru University of Commerce

Faculty of Commerce

The creation of self confidence is considered to be one of the most difficult problem for Japanese university students.

The possibilities of information and regional managers network to support the change of the students will be examined in this session.

現代の若者に関するいくつかの議論によれば、自己に対する確信感を持っている者が少ないことがその特徴の一つとしてあげられる。

自己とは何かを語る事がなかなかできない、あるいは自分の現在ある姿に対して深い納得感を持つことが難しい若者を現代社会は生み出している。

このような若者が存在することが確認されても、問題が解決された訳ではない。

彼等は変わることができるのだろうか。

しかも自分の変化に対し、孤立することなく、その変化を自己が了解しながら。

自己に対する確信を持つことができ、自己の

あり方を肯定できるようになるという変化を生み出すことに、ネットワークが関わっていくとしたら、どのような方策が考えられるのだろうか。

変化を経験したと考えられる幾人かの学生がいる。

学生の時に借りていたお金の返却に来て

「もう一度会社を作る決心をしました」と言った学生。

「単位にはなりません、授業をもう一度取ります。新しく受講する学生達と、もう一度新しいことをやってみたい」

「大学にも、全く来ませんでした。、家から出れなくなりました。そういう時期がありました。

今は、先輩と後輩の事を考えてコミュニケーションに臨めるようになりました」

とそれぞれ語ってくれた学生たち。

在学中起業を志すが一旦諦めて就職し、しかし再び挑戦することを決めた卒業生、新たな学ぶ意味の実現に、残された大学生活の時間を向かわせたいという学生、危うく「ひきこもり」になるところだったのだが、外部に対する積極的な関わりを目指す決意と行動を始めた学生。これらの学生の存在を背景としながら、その変化の考察の準備を始めることとしたい。

授業などの概要

学生達の変化の背景を理解するため、彼等が関わる授業どの仕組みを説明しておく。

約5年前、地元企業経営者などと「小樽インターネットまちづくり研究会」が結成された。これには数名の学生も参加し、企業組織内に保持されている様々な情報を取材、加工、編集、発信する一連の作業に加わった。この組織は「小樽ギガブレイク」というホームページを作成し当初の目的を達成、現在は解散している。

この研究会の参加企業の1部は、事業化を考える学生の取り組みの評価支援を経て、その後学生が行う幾つかのプロジェクトの相談にも応じてもらえるようになっている。

学生の変化のきっかけはやはり授業であり、それには「経営情報論（昼間コース）」「プロジェクト管理論」「経営情報論（夜間）」「ゼミナール」等がある。

それぞれの概要は以下の通りである。

・経営情報論

この授業では、ケーススタディを通じ、経営戦略論の基本を学ぶと同時に、グループに分かれて具体的な組織の中期戦略を検討する。後期のプロジェクト管理論のための助走ともなっている。

・プロジェクト管理論

地域で実際に経営活動を行っている企業と接触

し、その具体的な中期戦略を調査し、提言する。この段階で参加学生は中途半端ではないレベルまで自分の力で考え抜き、学生自身、参加者が納得できる正解を自分で作り出すことが必要になる。

昨年度からは、受講生を公募し、他の大学の学生も参加している。

この授業に協力してくれた企業の幾つかは、その後の授業や学生のプロジェクトへの協力、アドバイスにも応じてくれている。

・経営情報論（夜間）

夜間の授業では時間の関係で学生を直接内部の企業などと接触する機会を設けることが難しいため、インターネット上に学生の作成した情報を提供しそれに対する反応などをさまざまな人々から得ることができるようになっている。

例をあげれば、インターネット上の商店街における仮想イベント案のコンペ、地元企業のイメージを生かした仮想の新商品の提案マーケティングなどである。これらは「小樽ギガブレイク」上で公表している。

後者の場合、最終発表会を開催し、その際招待した地元企業の経営者の前で自分たちが考えた商品とマーケティングの案をプレゼンテーションし、採用の可能性を直接聞いている。

・ゼミ

ゼミに所属する学生のほとんどは、上記の授業を履修するが、彼らが授業の進行で大きな役割を果たす。逆にゼミ学生ではないが、上記授業を履修した学生が、それぞれの授業に関し学生のけん引役となることもまれではない。

また、ゼミの基本は経営と情報に関する基礎理論の理解が中心であるが、

自主的にプロジェクトを計画しそれを遂行することが求められる。例えば学生のビジネスアイデアコンテストを実施することであったり、マルチメディアコンテンツを制作配布するというプロジェクトであったりする。

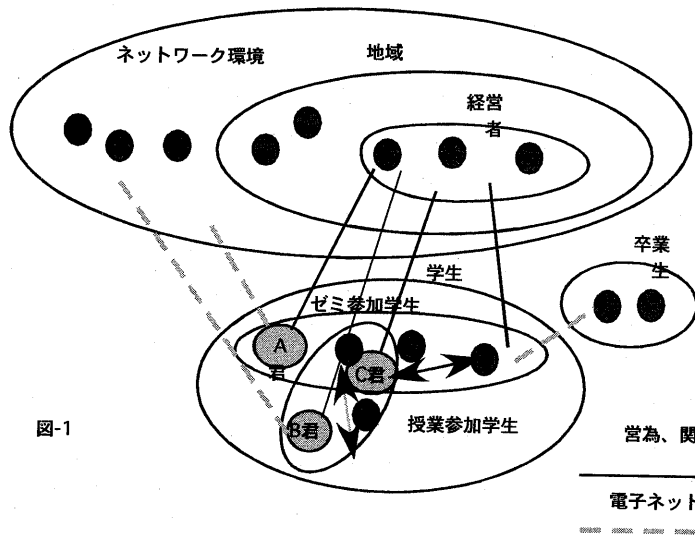


図-1

これらのプロジェクトについても、授業参加学生を中心にゼミ生以外の学生も参加することもある

情報環境

これらの授業に関連した、学生が利用するネットワークの場も幾つかの種類がある。

- ・授業受講生同士のメーリングリスト

これはプロジェクト管理論、経営情報論(夜)のそれぞれに利用。前者は他の大学の学生、一部学外アドバイザーを含んでいる。

- ・卒業生、異なる学年も含めたゼミのメーリングリスト。

- ・個人的なメールのやり取り

- ・受講生のアウトプットを公開するホームページ

・学生の取り組み状況、作成したアウトプットをのせ、学外者の意見を聴取できるようになっているホームページ。

これらの総合的な関係は図-1のようになる。

地域、ネットワークと学生の自己認知、自己革新のパターン、プロセス

このような仕組みの中で、彼等は彼等の変化のために、何を見つけていったのであろうか。

ある学生は、学生時に会社設立を目指すに当たり、街づくり研究会のメンバーである企業経営者の前でプレゼンテーションを行っている。

その場での評価、受け取ったメッセージが影響を持ったのはもちろんであるが、その場に臨むため準備

をすすめた事が彼等の気持ちの方向付けを固めていく上で、大きな力を持ったという。

また別な学生は授業の最終報告で、自分が考えることができたアイデアを地域の経営者の前でプレゼンテーションを行った。

彼の場合はそれを自分で商品化するとか、事業を起こすとかいうことは考えていない。

初めての経験だったがそれによって大学で学ぶことの今までにない意味を感じたという。

ネットワークでもらった外部からの意見もあった。そこで彼のアイデアに対する支持を得たことがそのプレゼンに臨む上で支えになったことは容易に想像できる。

こうした変化への影響をいくつかの要因に分けて見ることにしよう。

- ・可能性の発見

起業を考えた学生の場合、経済的利用が始まった初期の頃のネットワーク環境に接することにより、それが持つ事業上の可能性ならびに自己の将来の可能性に目を向けることになった。

地域の経営者にプレゼンテーションを行いその感触を得る事は、事業展開そのものの可能性を評価するという事になった。

まだ実現していない夢に、かなりの無理を承知で取り組んでみることは自分たちの力の可能性

の確認をすることであった。

・自己表現、自己投射

どの事例においても、自分が考えたことを他者の参加する環境の中へ投げ出すこと、表現することが重要な役割を果たしている。インターネット環境は、これに対し有力な手段を与えている。

また外部ではないが、授業参加者やゼミ生によるメーリングリストの運用は、参加学生の表現チャンスを増やすと伴に、自己の表現に対しどのような反応があるのか、表現されたものが自己の代理として環境の中で機能し、学生自身はそれが機能する姿を眼にする。

・投射された自己の評価、自己認知

そのような関係が重層的に形成されることにより、自己の有効性や意味を見だし、メッセージと生産と反応の確認の繰り返しの中で自己を認知し、自己を評価していくことになる。

・先行するものによる自己像の予測

学生同士のネットワークの中にも最も典型的には先輩という形で、自己に先行するものを見出すことがある。これは自己の将来像の予見につながることである。予見された自己は現在の自己の行動に意味を与えることになる。オフ

・自己革新の営為と自己獲得

目に映る、というだけでは新たな自己の獲得の

実現にはつながらない。自己を変えていく具体的な行為の実践が必要である。

あるアウトプットに向かう努力、その実践という営為により、その行動を起こしている自分というものを、確認することになるのである。この行為の場には空間的な場をを共有するような直接的な営為も含まれるが、ネットワークで自分のメッセージを形成していくような行為も含まれる。

・自己確認

このような繰り返しの中で、他者に対しても説明できるような自己の姿が自己の内面に形成されていく。そしてその自己の形成される方向が自己の内面で了解されていくと考えられる。

情報ネットワークと学生の変化に関する幾つかの条件

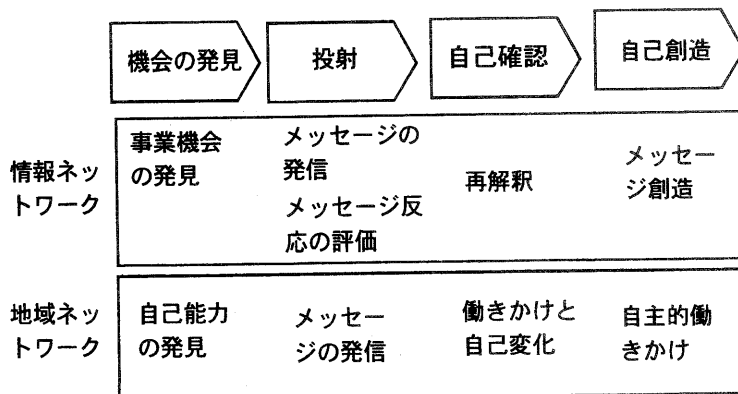
この態度変容などの仕組みについてはさらに理論的実証的な検討が必要である。

これまでの実践に基づきネットワークと地域社会で学生達の自己像の革新に有効な仕掛けを形作っていくことは可能であろうと感じている。

しかし、情報ネットワークシステムのみでは有効性は少ない。事実、ネットワーク環境を整備したことによって不用意なメッセージのやりとりによるネガティブな変化も生まれうる。情報

ネットワークシステムを通じた見知らぬ人々とのやり取りだけでは、学生が実感できる自らの変化を引き起こすのに十分なきっかけとならない。いくぶん逆説的に聞こえるが、物理的な意味での情報ネットワークからは切り離されているが、そこから評価を得ること

学生の変化とネットワークの連繋



が重要となるような外部的存在（この例では地域の経営者層がその役割を担う）を準備しておくことが有効であるように思える。学生の営為やオブジェクトの対象となり、ネットワーク上で話題になる地域経営者との連携活動は学生の態度変容に有効である。

例えばネットワーク上での議論が議論のみが目的になることを防ぎ、メッセージのやりとりによってつくり出さねばならない本来の目的を参加者に意識させてくれる。

物理的な情報ネットワークと、意味的に重なる地域ネットワークの組み合わせ、さらにそこへの関与のデザインが有効性を生んでいく力なのだと考えられる。

ネットワークが学生に与える影響はまた、時間的な重層的な関係の中で生じることを忘れてはならない。

さまざまな学生の変化のきっかけは、時間の流れの中で生じる。その中にはたまたまとしか言いようのない契機も存在する。ゆらぎの存在を前提として全体を調整していくようなコントロールが必要である。また、今回は詳述しなかったが卒業生が在學生にチャンスを与えているというポイントも見落としてはならない。

最後にこれらの取り組みに対して、暖かい目を注いでくれる地域企業も増えてきている。感謝を述べると共にこうした支援環境を育成していくことは若い年代に対する成長期会の提供のために必須の条件であろう。

参考文献等

影山 任佐 『「空虚な自己」の時代』 日本放送出版協会 1999

島蘭 進、越智貢 編『情報社会の文化 4 心情の変容』 東京大学出版会 1998

小樽ギガブレイク <http://>

www.ogb.otaru.hokkaido.jp/